

## 神が栄光を受けることと新しい戒め

ヨハネ福音書13:31-35

【新改訳 2017】

13:31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました。

13:32 神が、人の子によって栄光をお受けになったのなら、神も、ご自分で人の子に栄光を与えてください。しかも、すぐに与えてくださいます。

13:33 子どもたちよ、わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます。あなたがたはわたしを捜すことになります。ユダヤ人たちに言ったように、今あなたがたにも言います。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。

13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13:35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。

### 【祈りながら考えよう】

(1) 「十字架の贖罪の死」は、どうして「父なる神と御子が栄光を受けること」になるのですか。

(2) 主が与えられた「新しい戒め」はどういう意味で新しい戒めですか。2点挙げて下さい。

(3) 主のみことばによれば、「キリストの弟子であるしるし」は何ですか。

### 【解 説】

#### (1) 主イエスの死によって、御父は栄光を受けられる

ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました。神が、人の子によって栄光をお受けになったのなら、神も、ご自分で人の子に栄光を与えてくださいます。しかも、すぐに与えてくださいます。 (31-32節)

ユダが二階の広間から出て行くのを、イエス黙って見送られた。それは主イエスにとって、そのために世に来られた「死」にご自身を決定的におゆだねになり、そのことのゆえにご自身に至高の栄誉が帰せられた瞬間であった。

それでイエスは、「今、人の子は栄光を受け」と言われた。それはまた、「人の子の受難こそ神の愛の最高の啓示」であったから、神ご自身が最高の栄誉を受けられた瞬間でもある。それで続けて、「神も人の子によって栄光をお受けになりました」と言われたのである (31節)。

神ご自身が「人の子の受難によって栄光を受けられる」のであるなら、「人の子をもその栄光にあずからせて」くださらないはずはない。人の子は神ご自身の御力によって、死の中から復活させられ、ご自身の右の栄光の御座に着座させられるであろう。以上が32節の意味である。

これは、ピリピ2章9節「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」に一致する。このように御父の栄光と御子の栄光とは密接に結びついていて、分けることができない。また、十字架の栄光と復活の栄光も同様に分けることができない関係なのである。

私たちにとって、主の十字架上の死は敗北のように思えるかもしれない。しかし、主は、十字架上でご自分の贖罪の死を、地上でのみわざの最も栄光ある部分と見なしておられた。なぜか。御子の死ほどに、御父の聖・義・愛・あわれみ・約束への真実といった属性の栄光を現すのに寄与するものはないということである。

主はご自分の死を刑罰・恥・恥辱としては語られず、最も栄光ある出来事として、ご自分と御父との両方の栄光を現す事柄として語っておられる。 以上のことは、それに続いて語られた御言葉で明らかである。

「わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます。あなたがたはわたしを捜すことになります。ユダヤ人たちに言ったように、今あなたがたにも言います。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません」 (33節)

#### (2) 新しい戒め

##### ① どういう意味で新しい戒めなのか

地上に残される弟子たちは、彼ら一人一人のためにイエスがいのちを捨てて下さった犠牲的な愛に励まされ鼓舞されて、互いに愛し合うようになる。

そのように彼らが互いに愛し合うかぎり、彼らはイエスご自身のうちに住み、イエスご自身も彼らのうちに住まわれる。そればかりでなく、キリストの弟子たちが互いに愛し合うのを見て、この世は、彼らが「イエスとともに」いるの認めるようになる (使徒4:13)。

このように信じる者たちが、イエスの光のうちに歩んで「いのちの光」を持ち、永遠のいのちの祝福を味わうことができるのは、彼らに対するイエスご自身の愛に動機づけられて、彼らが互いに愛し合うことにおいてである。それでイエスは、互いに愛し合うことを「新しい戒め」としてお命じになった。

「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」 (34-35節)

旧約聖書の戒めでは、「自分自身のように愛しなさい」(レビ記19:18)であった。つまり、自分を愛するのと同じ程度に愛しなさいということであった。しかし、主の戒めでは、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」というのである。

この戒めを語られるすぐ前に、主は弟子たちの足を洗われ、「主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」(13:14)と言われた。

愛するとはこのようにすることなのだということ、主は身をもって示された。このように兄弟姉妹たちに奴隷として仕えることができなければ、それは本当の愛 (ギリシア語) ではないと主は言われる。

そのような愛について、主以前のだれも教えられたことはない。だから、ユダヤ人たちは、愛の戒めを持っているにもかかわらず、彼らは決して愛の共同体を形成することはなかった。

正しい教理、教えを持つことは大切なことである。しかし、それがただ頭だけのもので終わってしまうと、その正しい教理、正しい教えによって、他の人を裁くパリサイ主義になりかねない。愛とは何かということを知っていることは大切ではあるが、もっと大切なことは、それを実践することである。

主はそれを実践なさった。その主に見倣うようにというのが、主のこの新しい戒めの特徴である。主のように自己犠牲の愛をもって、兄弟姉妹たちに仕えることである。しかし、それだけの意味ではない。

##### ② 愛の源泉

ただ主がお手本を示されたということだけでなく、私たちが互いに愛し合うことができる「源泉」がそこにあるという意味で「新しい戒め」なのである。

この自己犠牲の愛は、生まれながらの人がいくらまねをしようとしてもできるものではない。必ず行き詰まってしまう。それは、キリストの十字架上の死によって示された「神の愛を頂いた者」にだけできる愛である。聖霊が信じる者に従う力を与えてくださる。

主はご自分の十字架上の死によって新しい愛の共同体としての教会を生み出そうとしておられる。その新しい共同体である教会の特徴がこの「愛」なのである。

#### (3) キリストの弟子のしるし

だから、キリストの教会の目印はこの愛である。教会がこの世に対する強力なあかしは、この愛だと言われた。

「互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」 (35節)

この御言葉に誤解の余地はない。愛はキリストの弟子の崇高な特質であり、キリストの弟子を見分けるしるしでなければならぬ。主は、賜物・奇蹟・知的力量ではなく、愛を、愛という徳を、「弟子であることの証拠」として示された。もし愛がなければ恵みを受けていないのであり、再生していないのであり、まことのキリスト教に達していない (J・C・ライル)。

教会はキリストの弟子たちの集団である。天国を目指して、「愛のデモンストレーション」をしている集団である。「愛の主の栄光」が現されるために、ひとり残らず「愛の人」にさせていただく。主がそうさせてくださる。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。  
(ヨハネ13:34)